

ひがしみの夏秋トマト

栽培

岐阜県を代表する野菜「トマト」

岐阜県内の夏秋トマトは、標高300m以上の中山間地で栽培されています。JAにより6月～11月まで市場に出荷され、野菜品目の中で最も販売額が多く、本県を代表する野菜となっています。

「ひがしみの」トマト栽培の歴史

東美濃地域での夏秋トマトは歴史が古く、昭和30年に中津川市阿木において露地栽培が開始され、昭和36年に枇杷島市場、38年には名古屋市場本場への出荷が始まりました。これを契機に各地で生産組合が誕生し、夏秋トマト栽培が拡大。昭和44年には、恵那夏秋トマト振興会(現:東美濃夏秋トマト生産協議会)が設立され、以後50年にわたり産地として、生産出荷に取り組んでいます。市町村合併した現在も、各旧町村単位に生産組合があり、栽培技術向上に向けた研修会を行っています。

昭和30年
栽培開始

昭和36年
枇杷島市場へ
出荷

昭和38年
名古屋市場へ
出荷

雨除けハウスで育つトマト

夏秋トマト栽培では、「雨除けハウス(天井ビニールのみの簡易なパイプハウス)」が用いられています。

雨除けにすることで、長期にわたる樹勢の維持・調節、病害虫の軽減、日焼け果、裂果等の防止などにより、品質の高いトマトを生産することができます。

4月下旬から6月下旬にかけて定植が行われ、出荷は6月下旬から11月中旬となります。



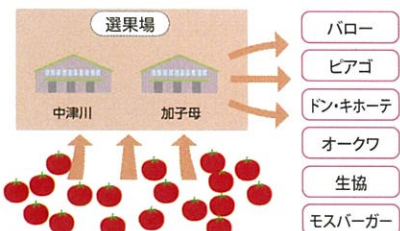
雨除けハウス

定植
4月下旬～
6月下旬

出荷
6月下旬～
11月中旬

選果と出荷

収穫されたトマトは、管内2か所にある選果場(中津川、加子母)に集められます。選果場では、出荷規格に基づき、選果、選別され、4kg段ボールやスタンドパックに詰められ、各市場にほぼ毎日出荷されます。本県産夏秋トマトは、京阪神・中京市場を中心に出荷されており、東美濃地域からは名古屋・岐阜・京都市場に出荷しています。各市場からは、パロー、ピアゴ、ドン・キホーテ、オークワ、生協、モスバーガーなど外食向けにも販売されています。

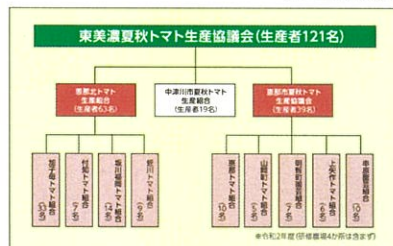


岐阜県を代表するトマト。「ひがしみの」地域の出荷量は、県下でも常に上位を誇っています。もっともっと知ってもらうため、「ひがしみの」のトマトをご紹介します。



JA名	面積 (ha)	出荷量 (t)
飛騨	123.9	11,421
東美濃	18.7	1,425
めぐみの	11.8	754
県全体	154.4	13,600

令和2年全農岐阜県実地調査



常に進化。栽培改善の取組

トマトは本来連作ができませんが、雨除けハウスの普及とともに連作が行われるようになりました。

その結果、土壌病害(連作障害)の発生が問題となりましたが、昭和50年代初めには、接ぎ木栽培が普及し、土壌病害の発生は減少しました。現在もより良い台木の選定試験を行い、導入を行っています。

近年では、県研究所が開発した夏秋トマト3Sシステムの試験的導入も行われ、土壌病害の回避と合わせ、従来栽培より高い生産性の実現に成果が上がりつつあります。

「桃太郎」から「麗夏、麗月」へ

栽培品種では、昭和61年に従来品種と大きく異なる甘熟タイプの「桃太郎」を全面導入しました。冷涼で昼夜の温度差がある気候と相まって、色・食味とも優れ、市場から高い評価を得るようになりました。現在は、市場ニーズに合わせた裂果の少ない赤熟トマト品種として、中津川選果場では「麗夏」を、加子母選果場では「麗月」を中心に栽培に取り組んでいます。

れい か
麗夏

肉質がしっかりしているのが特徴のため、他の品種より真っ赤に熟しても歯応えがよく、日持ちがします。



れい げつ
麗月

極硬玉で裂果に強い。丸みのある形で色づきがよく、深みのある味わいです。甘味の中にほろよい酸味があります。



もも た ろ う
桃太郎

市場に出回っている大玉トマトの中でもっとも出荷量の多い品種。果肉がほどよいかたさで軟化しにくいのが特徴です。

